

京都大学	博士(文学)	氏名	林 由 華
論文題目	南琉球宮古語池間方言の文法		
(論文内容の要旨) 本論文は、南琉球宮古語池間方言（以下池間方言とする）のフィールドワークに基づく記述文法である。1章池間方言の概要と先行研究、2章音声・音韻、3章形態論、4章統語論の基礎的な構成、5章終章の5章からなる。また、付録として、談話の書き起こし資料と動詞活用表が含まれる。 1章は導入である。まず、池間方言の話されている地域の地理的位置、産業、歴史について概説する。次に日琉諸語、琉球諸語の中での池間方言の系統的位置について述べる。この章の中心は池間方言の話者の現在の状況についての概観であり、主として論者の調査経験に基づいて記述されている。社会言語学的な客観的手法にのっとった調査の結果ではないが、その予備的考察と位置づけられる。 論者は、危機言語の状況での話者分類の考察をしている Grinevard and Bert (2011) に基づき、話者を「流暢な話者」「準話者」「末期話者」に分類し、その上で、それぞれの話者が持っている言語知識の質の違いについて、話者が共有している言語の場の違いなどを基に述べている。池間方言の社会言語学的研究である Iwasaki and Ono (2009) を引用し、流暢な話者と池間方言が話される場の特徴について、論者の経験に基づく観察とそれについての考察を加えている。また、若い流暢な話者における池間方言の使用度が、「在外歴」や「学歴」とは必ずしも相関しないことを述べ、今後の調査の可能性について言及している。1章の残りの部分では、先行研究と本研究にかかる調査についての基礎情報が述べられている。 2章から4章では池間方言の文法記述が述べられる。 2章は、音声・音韻論の記述であり、母音・子音の各音素、音素配列規則、(形態)音韻規則、プロソディーについて述べている。音素では、/i, e, a, o, u, i/ の6つの母音と /p, b, t, d, k, g, c, z, f, v, s, h, m, n, ŋ, r, w, j/ の18の子音を認めている。母音には長短の区別がある。無声鼻音 /ŋ/ は、日琉諸語のうちでは池間方言にしか見られないものである。また、/i/ については /c, z, f, s/ を頭子音として持つ形でのみ現れ、/e, o/ は現れる語彙の種類が借用語以外では終助詞や間投詞などに限られている。/fi/ ついては、先行研究では /fu/ とされているものに対応するが、/ci/, /zi/, /si/ と形態音韻論的に同じ振る舞いをするを理由として設定されている。また、この /i/ は、宮古語諸方言の研究において「中舌母音」「舌尖(尖)母音」と称され、音声・音韻的に歯茎摩擦音に相当する子音的性質を備えており（このため子音として分析されることもある）、宮古語音韻論の問題としてさかんに議論されてきたものに対応する。			

池間方言においてはこの母音が衰退していることが知られているが（平山ほか 1967、平山編 1983 など）、この問題は一部の形態音韻論の中のみ現象とすることができ、この母音について音韻的子音性を考慮する必要はないことを明示している。

2 章の後半部分では、語彙的な対立をもつプロソディーについて述べている。従来、池間方言には 2 型のアクセント型の区別があるとされてきたが（平山ほか 1967、平山編 1983）、五十嵐陽介氏によって、分析の単位を文節、句、文へと広げていくと、3 型の区別が見られることが発見されている（五十嵐ほか 2012 など）。この 3 型の区別をどのように分析するべきかはまだ明らかではないが、本論文では五十嵐ほか（2012）などを基に、3 型の区別がどこで現れるかについて説明している。2 章の最後では、本論文で用いる表記法について説明している。

3 章では、基礎的な形態論および統語論について記述している。まず、前半では各品詞における閉じたクラスの語彙や形態論が扱われる。品詞としては、名詞、連体詞、動詞、副詞、助詞、間投詞、接続詞を認める。形容詞については、名詞や動詞などとならぶ品詞のカテゴリとしては設定することはできず、形容語根は接辞を伴って動詞もしくは名詞に派生して文に現れることを示している。名詞や動詞については自らを主要部とした句を形成するが、その構成についてもここで記述される。名詞については、名詞句の構成とその中に含まれる連体詞や、複合などの語形成法、名詞の下位カテゴリに含まれる指示詞、代名詞、不定詞、疑問詞などのリストを扱っている。動詞は最も形態論が複雑であり、その構成について詳しく述べている。動詞形態論の記述では、Shimoji (2008) における宮古語伊良部方言の記述を基に、動詞の屈折形態の構成を、語幹、語基、屈折接辞に分けて記述している。動詞語彙は、どの屈折接辞が付くかによって語基の変わるタイプ（第 2 類）と変わらないタイプ（第 1 類）に分けられる。このうち第 2 類動詞の語幹末音は、歴史的音変化により大きく変化する。その変化のパターンを 10 種類に分け、そのリストを示している。動詞については、形態論のほか、句も含めた動詞連続体の構成法と意味、日本語との違いについて述べている。その他の品詞では、助詞について、そのリスト、それぞれの承接関係、意味を記述している。助詞はそれが付く先、承接関係、機能にしたがって、格助詞、取り立て助詞、接続助詞にわけて記述している。副詞、間投詞、接続詞については、閉じたクラスをなす類の語彙のリストをあげている。

3 章後半では、文の構成を主に扱っている。発話行為（speech act）の違いに基づく基本的な文タイプにおける単文の構成の仕方、また複文の構成の仕方について記述している。

4 章では、3 章では扱いきれなかった動詞のテンス・アスペクト、モーダル形式の意味、情報構造などについて、主に日本語との対照によって記述している。4.1 では、池間方言の動詞のテンス・アスペクトの主要形式として、日本語のスル（非過去）／シタ（過去）／シテイル（非過去進行）／シテイタ（過去進行）に対応する形式があげ

られる。しかし、意味機能は日本語と大きく異なるところもあるところもある。ここでは、田窪（2008）の日本語の記述や井上・生越・木村（2002）などの日韓対照記述を用いて、それらの言語との対比の中で、池間方言のテンス・アスペクト形式の意味を記述している。4.2では、琉球諸語においてはこれまでほとんど扱われることのなかった形式名詞として現れる認識のモダリティを表す形式群の体系的な意味記述を試みている。これらは意味的に日本語の「ようだ」や「だろう」などに対応しているが、これらは何らかの話者の推論を表す形式である。ここでは、そのような形式の記述をできるだけ客観的基準によって行う試みとして、田窪（2006）に見られる日本語の「ようだ」「だろう」などのモーダルについて推論形式の方向を援用して記述を行っている。4.3では、池間方言の情報構造について、助詞によるマーキングと述語の種類の関係について記述している。その中で、琉球諸語には焦点標識と呼ばれる *du* に代表される形式が広く見られるが、池間方言においては、それは常に焦点構造を決定する要素になっているわけではなく、情報構造の基本構造は述語の種類と非焦点標識（日本語の主題標識にあたる）によって決まること、日本語と異なり、池間方言においては述語の形態（主に動詞の屈折形態）によって焦点の持ちやすさが異なっていることを示している。4.4章では、このことが池間方言における係結びを引き起こしていることを示している。4.4章では、まず、「係結び」が示す現象について、それを「文中の（係）助詞と述語形式がなんらかの関係をもつ」という程度に広義にとることを説明している。Shimoji (2011) では、宮古語伊良部方言において必ず焦点となる動詞形態があり、それが文中の焦点標識 *du* と共起せず、そのような *negative concordance* の関係が伊良部方言における係結び（Shimoji 2011 では「準係結び (*quasi-kakarimusubi*)」と呼んでいる）を引き起こしているとしている。本論文では、池間方言においては「必ず焦点に入る動詞形態」だけでなく、「焦点に入ることができない動詞形態（＝非過去形）」があり、非焦点標識を用いて述語以前の要素がすべて非焦点形になっている場合、非過去形で文を終止することができないという現象が生じることを示している。

5章では1-4章の議論をまとめている。

付録として、形態素ごとのグロスと日本語共通語による翻訳を付したテキスト2編と動詞の活用形リストがつけられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、琉球諸語宮古語池間方言の記述文法的研究である。琉球諸語は相互に意志疎通ができない5つの言語群からなり、そのすべてがすでに次世代への言語継承が行われていない危機言語である。論者は、宮古島西原地区で話されている池間島方言西原下位方言を扱っている。この地区は池間島から明治7年に宮古島に強制移住させられた住民が定住している。琉球語の研究は古くからあり、多くの論文、研究書が公刊されているが、国語学的、言語学的に興味を引く特定の現象を扱ったものがほとんどである。記述言語学的な視点で一つの方言を現代記述言語学の手法で網羅的、体系的に記述されたものは、これまで下地理則の伊良部長浜方言、トマ・ペラルルの宮古島大神方言の2編しかない。本論文は、3番目の記述文法にあたる。論者は2006年1月から6年にわたってこの方言の調査を行っている。研究のデータはすべて論者その他の共同研究者との現地調査に基づく一次資料である。

本論文は全5章からなる。第1章は、池間方言の琉球諸語における位置づけを述べ、次にこの方言の話されている西原地域の池間からの移住の歴史を概観している。さらに、言語使用状況の記述を行う。

第2章では、池間方言の音声・音韻体系が扱われている。この方言は宮古語の特徴である初頭の /n/ と阻害音との連続(例: /nta/ (土)、/nsu/ (味噌)、/ntsi/ (道))、/vv/、/ff/、/tt/ などの二重子音連続(例: /vva/ (あなた)、/ffa/ (子供)、/tti:/ (キセル))をもつ。日本語ハ行初頭音には /p/ 音でなく /h/ 音が対応し、無声鼻音 [ŋ]、[m̥] (例: [ŋnu] (角)、[m̥mu] (雲)) が存在するなど、他の宮古諸方言にはない特異な音声、音韻体系を持っている。論者はこの方言の音素体系を立て、音声実現規則を記述している。また、この言語は語彙音調を持つが、これまで平山輝男によって2型でしかも崩壊しつつあると記述されていた。論者は単独発話では中和していた区別が、助詞を付けることで現れることを示し、調査したすべての話者で語彙声調が区別されることを示した。論者の共同研究者の五十嵐陽介はさらに動詞を付けることで、この方言が3つの語彙音調型を持つことを発見したが、その基礎は論者が作ったものと言える。

第3章は語構成、形態論で、品詞分類と各品詞の記述を行っている。論者は品詞として形容詞を立てず、これまで形容詞とされてきたものは、拘束形態素である形容語幹に動詞派生辞、あるいは名詞派生辞を接続させて初めて活用ができるとしている。第3章で注目すべきは動詞形態論である。池間方言の動詞形態論の先行研究は平山輝男のものがあるが、複雑でしかも一般化が十分でないため、非常にわかりにくいものであった。論者は下地の動詞形態論の記述方法を援用して、動詞語基を分類し、動詞接辞の相互接続の規則を示して、非常に簡潔でわかりやすい体系を提示している。

第4章は統語論の記述である。前半では池間方言の認識のモダリティと証拠性のモダリティに関する記述を行なう。両者はどちらも推論に関わる形式であるが、関わる推

論の方向性が逆であることが知られている。論者は、推論の方向性を利用して、この方言のモダリティ形式の統語的、意味的記述を行っている。その際、これまで先行研究で記述されたことのない形式をいくつも発見し、その精密な記述を行っている。

第4章後半で論者はこの方言における焦点形式と文末述語形式の共起関係の記述を行っている。琉球諸語の多くは焦点助詞 *du* があると文末の述語が連体形で終わるという、係り結びがあることが知られている。しかし、宮古語では、連体形と終止形の形態の区別がないため、これまで係り結びはないとされていた。論者は池間方言に係り結びとみなすべき構造があることを論証している。まず論者は池間方言の存在動詞に連体形と終止形の区別があり、焦点形式は連体形としか共起しないことを発見した。次に、これまで連体形と終止形とが中和していると思われていた形式は、焦点形式が同一文中になければ単独では述語になれず、文を終止できる助動詞類を接続されなければならないことを発見した。論者は池間の動詞連体・終止形は、基本的に連体形とみなすべきであり、本来的に焦点を表せる主格形や焦点助詞を付加した形式がなければ単独では文を終止する述語となりえないことを明らかにした。これは係り結びであると論者は結論する。もし論者が正しければ、他の宮古方言においても係り結びがある可能性が開かれ、これまでの宮古語の研究を見直さなければならなくなる重要な発見である。

第5章はまとめである。付録として、二編の談話の書き起こしを、形態素ごとのグロス、日本語の翻訳とともに付け、動詞の活用の表を載せている。

本論文は、池間方言に関しこれまでの研究では観察されなかった多くの事実を記述している点で評価される。しかし問題がないわけではない。まず、第1章の西原地区における言語使用状況の記述は非常に興味深い観察が含まれるが、論者の観察を裏付ける客観的証拠が不足しているため説得力を欠いている。また本論文ではこれまでに記述されていない形式を多く挙げているが、その用法を示すための例文が付されていない箇所が散見する。しかしこれらは本論文の価値を大きく減じるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2013年2月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。